アメリカ文学における知性と反知性の構図

——James, Steinbeck, Warrenの描く医師の姿を通して——

前川玲子

はじめに

歴史家Richard Hofstadterは*Anti-Intellectualism in American Life* (1963)の中で，intellectualism（知性主義）とanti-intellectualism（反知性主義）はアメリカの生活のあらゆる面，すなわち宗教，教育，政治，ビジネスなど様々な側面で，抗争を繰り返してきたと述べている。ホーフスタッターのいう反知性主義的態度とは，(1) 知性万能主義への感性，情緒の側からの反発 (2) 科学的・合理的知性に対峙する宗教的あるいはイデオロギー的な熱狂，狂信 (3) 知識を独占する知識階級，知識人への「持たざる」民の反発や抵抗，さらには (4) 伝統や前近代的感性の近代に対する反発などである。アメリカ文学における医師の描き方にも，知性主義と反知性主義の相克の構図が様々なヴァリエーションで見られる。

アメリカ文学の中で，医師はどのように描かれてきたのだろうか。Nathaniel Hawthorneの*Scarlet Letter* (1850)のヒロインであるHesterの夫Chillingworthは，献身的な医師を装って，牧師Dimmesdaleの心の中を覗き込み，秘密を探り出し，悪魔にも似た執拗さで追い詰めていく。こうした冷酷で悪魔的な医師のイメージは，20世紀になると，もう少しヒューマンな側面を持ったものに変わってくる。例えば，Ernest Hemingwayの*In Our Time* (1925)に出てくるNickの父親は，インディアン・キャンプに行って原始的な医療器具で帝王切開をやってしまう豪胆で男らしい人物，しかし個人生活では妻との関係が冷え切っている孤独な人物として描かれている。近代においては，医療の進歩と文明の進歩が手

を結んできた感があるために，医師は文明の先駆者，科学的知性の代弁者，ウィルスなど人間の体に巣くう「悪」と戦い，「善」を志向する人というプラスのイメージが付与されてきた。こうした進歩的，改革者的な医師像が20世紀に入ると主流になった半面，依然として医師はヒューマンな感性を持たない冷酷な存在で，その知性や理性は情けの部分を捨象してしまうというネガティブなイメージを付与されることも少なくない。アメリカでは特に，医師は知的なプロフェッショナルとして尊敬されると同時に，エリート階層の担い手として羨望の的にもなってきたことから，アメリカ文学の中での医師像には，「反知性」の側からの反発，期待，鬱憤や羨望が込められている感がある。

本論文では，Henry James の *Washington Square* (1880)，John Steinbeck の *In Dubious Battle* (1936)，Robert Penn Warren の *All the King's Men* (1946) という三つの作品における知性主義と反知性主義のせめぎ合いといったことを考えていきたい。三作品のそれぞれには，科学的知性の代弁者としての医師と，その人物に対立したり，反発したりする人物が対照的に配置されていることに注目し，知性と反知性の対立のドラマが，各作品で描かれる医師の姿にどのように反映されているかを見ていくことにする。

(1) *Washington Square* を読む

ジェイムズが37歳の時に出版された『ワシントン広場』に登場する Austin Sloper は，著名な医者で財産家であった。冒頭の部分で，アメリカにおける医師の地位の高さがまず説明されている。

> This profession in America has constantly been held in honour, and more successfully than elsewhere has put forward a claim to the epithet of 'liberal'. In a country in which, to play a social part, you must either earn your income or make believe that you earn it, the healing art has appeared in a high degree to combine two recognized sources of credit. It belongs to the realm of the practical, which in the United States is a great recommendation; and it is touched by the light of science — a merit appreciated in a community in which the love of knowledge has

not always been accompanied by leisure and opportunity. (5)

有閑階級による知的道楽を許さない実用的アメリカで，医師は実用的な処方術と科学的探究心を併せ持った存在として重宝され，さらに，「進取の気性に富んだ(liberal)」知識人として尊敬を集めたというのだ。

このニューヨーク随一の腕のいい医者であり財産家であるスローパー氏という登場人物を，ジェイムズは畏怖と憧憬の念を滲ませながら，同時に極めて批判的に描いている。スローパーの患者は女性がほとんどだったとされており，婦人科かあるいは今でいう精神分析医であったのかは推測の域を出ないが，いずれにせよ，彼は人の体あるいは心にメスを入れ，病気を治す専門家であり，それ故に普通の人間よりも鋭く物事の本質—それが病原菌であれ，病巣であれ，神経疾患であれ—を見通すことができ，危険に対して高い技術をもって対処することができるという自信を持っている。但し皮肉にも，彼は最も身近な存在である家族の不幸を食い止めることができなかった。長男を3歳の時に病気で失い，また，その2年後に，娘を出産したばかりの妻を失った。しかし，こうした経験によって，彼が自分の判断にも誤りがありうることを悟ったり，運命の予測不可能性に対して謙虚な気持ちになったりすることはなかった。むしろ，苦い経験は，その知的な能力をさらに研ぎ澄まして，運命のさらなる悪戯を未然に防ごうというような方向に彼を導くのである。彼は，自分のまわりの者たちをアイロニカルな眼で眺め，特に患者も含めた女性たちを，理性(reason)の欠落した愚かな者たちだと考えずにはいられない。

さて，スローパーの娘Catherineが21歳になったところから，小説の主要なドラマが展開する。彼女は，従兄弟の婚約パーティーの席で，Morris Townsendというハンサムな青年に出会い，話は二人の婚約というところまで急速に進んでいく。科学的な知性の持ち主であるスローパーは，姪の恋の行方にロマンティックな関心を寄せる妹のMrs. Pennimanのことを，愚かで反知性的な人物だと密かに軽蔑している。未熟な娘と愚かな妹という二人の女たちを皮肉な眼で見ているスローパー氏が，娘の人生に突如現れたモリスという青年に強い不信の眼を向けるのは当然のなりゆきだといえる。医者である父親は，

娘をこの世に送り出すこととひきかえに最愛の妻が死んでいくという悲劇を，いわば不条理な悪戯—自らの医者としての技術と知見に反する挑戦だと受け取った。聡明で美しい妻を失い，代わりに平凡でとりえのない娘を得たという不条理が許せず，娘をあるがままに受け入れて愛することができない。したがって，こんな娘を本当に愛する男がいるはずがない，言い寄る男がいれば，それは金が目当てだと推論し，持参金をやらないという脅しで，娘の男への愛，男の娘への愛を試そうとする。モリスは，スローパーの思わく通り，持参金なしの結婚には二の足を踏んで結局キャサリンのもとから去っていく。キャサリンは，モリスが去った後は静かな「オールドミス」としてニューヨーク上流階級の模範的な独身女性になってゆくのだが，その娘に対してスローパーは，死ぬ直前に再び自分への服従を試そうとする。すなわち，自分の死後モリスとは絶対に結婚しないと誓わない限り相続財産を減らすと宣言するのである。

このように，父親は策を弄して娘の心を操ろうとする—いわばpsychological engineeringを行おうとするのだが，この一見大人しく強い自我を持っていないようにみえるキャサリンは，最後まで父親が心という神聖な場所に入ってくるのに抵抗するのだ。こうして全知全能でありたい医者は，娘の心を見通す特権を行使することができず，患者の患部にメスを入れる時のような密かな満足感を味わうこともできなかった。これは，彼が受けねばならなかった罰だとジェイムズは書いている。

> We know that she had been deeply and incurably wounded, but the Doctor had no means of knowing it. He was certainly curious about it, and would have given good deal to discover the exact truth; but it was his punishment that he never knew—his punishment, I mean, for the abuse of sarcasm in his relations with his daughter. (156)

いわば患部—それが身体的損傷であれ心の傷であれ—を医者に見せようとしない患者のように，キャサリンは父親に自分の「心」の中を隠すのである。この“concealment”こそが，彼女の静かな抵抗だといえる。優秀な医者であり，し

かも科学的な合理性の持ち主であるスローパーは，知的にも，人間的な洞察力においても，娘よりはるかに優越した立場にいるようにみえる。だが彼はその人生の中で，ある種の「敗北」を余儀なくされる。息子や妻を病死や出産後の死亡という予見不可能な悲劇で失い，その上，娘の不幸を「予防的に」阻止しようと試みるものの，それが逆に彼の予期しない結果—すなわち娘が父親への愛と信頼を失うという結果に終わるのだ。

批評家Leon Edelは，この父親像にはジェイムズにとって常に畏怖と敬愛の対象だった兄William Jamesの像が重なっていると書いている (Edel 399)。一面では，キャサリンは，無垢で単純なアメリカ的人物であり，モリスは中途半端にヨーロッパ化した，計算高く，不誠実な人物であり，彼らに対して，スローパーは，高名な兄にも似た実践的でかつ論理的な新しいアメリカ的知性の権化として描かれているようにもみえる。しかし，エデルが示唆するように，ジェイムズの中で兄に対する敬愛と同居していたのは，人間の心理は分析可能だとした心理学者ウィリアムへの反感や違和感であったかもしれない。ジェイムズは難解な文体を駆使する知性主義的な作家であるが，科学的知性や理性が万能だと考えていたようには思われない。むしろそこから取りこぼされた何か—それを心というか精神というか，愛というか信頼というかはさておいて—の欠落や喪失を深く悼む小説を書いていったように思えるのだ。ジェイムズ初期のこの小説が，反知性的小説だという気は毛頭ないが，その医師スローパーの描き方において，ジェイムズの中にあった知性万能主義への疑問，頭脳に対するheartの再評価，犯すべからざる心の領域に踏み込むことへの躊躇などが読み取れるように思われる。キャサリンは，医師スローパーに代表される合理的知性に，ほとんど無力とはいえあくまで抵抗を続ける「心」の陣営に与する人物として，*The Portrait of a Lady* (1881) のIsabelや *The Wings of the Dove* (1902) のMillyなどにも通じるヒロイン群の先駆け的人物だともいえよう。

(2) *In Dubious Battle* を読む

南北戦争前の「お上品な」ニューヨーク上流階級を舞台にしたジェイムズの作品から，スタインベックが1936年に書いた小説に話を移すことには，かな

りの飛躍があるかもしれない。しかし，アメリカ小説における医師の描写の変化と連続性を見るうえで，『疑わしき戦い』は興味深い作品である。この小説の題材になっているのは1929年の大恐慌後，特に1933年前後に多発したカルフォルニアの果樹園労働者のストライキである。1930年代の「ストライキ小説」と同列に扱われることもあるこの小説に，客観的な観察者の視点を提供すると共に，哲学的あるいは思弁的要素を与える役割をしているのが，Dr. Burtonの存在である。

バートン医師は，小説の中盤に，ストライキ中の労働者が集まる仮設キャンプの公衆衛生，怪我人の治療などを担当する人物として登場する。トイレに消毒薬を蒔かせたり，仕事中の怪我で死にかけている老人の治療に当たったりする実践的でヒューマンな人物として描かれている。上流階級の女性を主として診察するスローパー氏とは対照的に，バートンは貧しい労働者を相手に診療に当たる，いわば人民の味方としての医師である。実はバートンが「本物」の医師として登場する前に，党員でストの実質的指導者となるMacが，不正医療行為をする場面が出てくる。彼は，季節労働者のリーダーであるLondonの信頼を得るために，その娘Lisaの赤ん坊を医者のふりをしてとりあげる。先に偽の医者を登場させることで，正真正銘の医師としてのバートンの存在価値が強調されるのである。

バートンは党員ではないので政治的イデオロギー，ないしは組織への忠誠のために労働者のストライキ支援をしているわけではない。また，金持ちの治療をすればお金がもらえるのに，無報酬で仕事をしている。バートンは，政治的なマック，宗教的ともいえる情熱でストライキに文字通り身を捧げるJimという二人の人物に協力しながらも，彼らに対峙する人物である。彼らの推進している「疑わしき戦い」の現実にメスを入れ，労働者のユートピアの夢がディストピアの悪夢に変わっていく様をその眼で目撃し，そしてある日，忽然と姿を消してしまう。警官や自警団（つまり敵側）に殺されたのか，この「勝ち目のない」空しい戦いに嫌気がさして逃走したのか，あるいは仲間の誰かの裏切りにあったのかは謎のままだ。

バートンは，ストライキを行っている1000人余りの労働者を「集団人間」

(group-man)と呼ぶ。彼によれば，集団人間は個人を超えた大きな事を成し遂げる可能性があるが，同時に，集団になった時に人間の醜悪で残虐な本性は最も極端に露呈されるというのだ。集団人間の行動を，感情を交えず冷静に観察することは，バートンの職業的習慣，すなわち試験管の中の病原菌の繁殖を顕微鏡で眺める医師の習慣でもあるのだ。さらに，バートンの医師としての観察眼は，こうした集団人間をストライキ続行のために煽動し，操作しようとするマックにも向けられる。大衆は血を見ればその動物的な本能が刺激され闘志がわくと信じ，もはや方向性も目的も動機も「疑わしい」戦いを夢遊病者のように続けるマックは，ある種の狂気，理性を失った人間の象徴であるともいえる。バートンはマックの批判者—大衆のための戦いであるべきストライキを，憎悪と暴力の悪夢へと変えてしまうマックの反知性的逸脱に対して，理性の側から批判する人物である。バートンは，集団人間，その司令塔のマックに対する絶望から，つまりこうした反知性の集団から離脱して，より理性的な道を歩むためにキャンプを去った，あるいはスタインベックが去らせたと考えることもできる。シンパサイザーで負傷したAndersonの見舞いに行くと言って姿を消す前に，バートンは，この戦いから良いものが生まれてくるというジムの楽観論に対して極めて悲観的な見解を示す。

> "There aren't any beginnings," Burton said. "Nor any ends. It seems to me that man has engaged in a blind and fearful struggle out of a past he can't remember, into a future he can't foresee nor understand. And man has met and defeated every obstacle, every enemy except one. He cannot win over himself. How mankind hates itself." (262)

バートンは鋭い理性，知性の持ち主であり，その上，医師としての実践的な職業意識の持ち主であり，さらには，大衆の弱さを熟知しながらも彼らのために一生懸命働くという意味では情け深いヒューマニストでもある。その姿からは，大衆蔑視のエリート主義者ではなく，伝道者，社会改革者的な医師—すなわち知性と情を調和させた人物像が浮かび上がってくる。Peter Liscaが示唆す

るように，マックの作り出したディストピアに絶望して姿を消す医師バートンの視点をスタインベックが共有していた(Lisca, 126)とすれば，作者もマックを観察し，その病理を批判的に分析したと考えられる。つまり図式的に言えば，反知性的な群集を巧みな言葉で操作するマックはいわば確信犯的な反知性主義者で，意識的・戦略的な反知性の扇動者—つまりヒトラーのような人物に近い。その対極に位置する知性主義的なバートンは，その真実を見る眼—マックのデマゴギー，ジムの狂信，民衆の無知を見通す慧眼を持つ賞賛すべき人物ということになる。

しかしここで次のような疑問が起こる。一見マックに対して批判的にみえるバートン医師も，「集団人間」を細菌や細胞を見るように科学的に分析しようとする点で，大衆の制御と操作を望んでいるマックの非人間性を共有していないだろうか。次の引用に見るように，バートンは，疾患であれストライキであれ，傷口という戦いの現場を観察することが重要であることを強調する。

> "I want to *see*," Burton said. "When you cut your finger, and streptococci get in the wound, there's a swelling and a soreness. That swelling is the fight your body puts up, the pain is the battle. You can't tell which one is going to win, but the wound is the first battleground. If the cells lose the first fight the streptococci invade, and the fight goes on up the arm. Mac, these little strikes are like the infection.... I want to see, so I go to the seat of the wound." (147–48)

バートンは，最初に登場する第7章で，「顔は女の子のように繊細で美しく，大きな目はブラッドハウンドの目のように，やさしく悲しげな表情をたたえていた」(『疑わしき戦い』，154）と書かれており，一貫して彼の「悲しげな目」(sad eyes)が強調されている。病気の傷を，そしてそうした生理的現象と同じ社会的現象としてのストライキを「見たい」という欲望は，彼があくまで全てを見ようとする全知全能の神のような欲望を持っていることを示しているといえる。

では，バートン医師に対するスタインベックの見方は，先に述べたように，

知性と情緒，あるいは理想と実践，個人主義と同胞愛の調和がとれた人物への賞賛だったのだろうか。つまり，マック，およびその指導下の集団人間の狂気，反知性に対する知性，理性の代表者バートンに彼はエールを送ろうとしたのだろうか。しかしそれならなぜ，彼は小説の途中で姿を消すのか，彼の最後の姿は大変孤独で救いのないものであるのかという疑問が残る。アンダーソンを見舞うために最後にキャンプを出て行く前にマックと会話するバートンの姿はパセティックなものである。

> Mack studied him. "What's matter, Doc? Don't you feel well?"
> What do you mean?"
> "I mean you temper's going. You're tired. What is it, Doc?"
> Burton put his hands in his pockets. "I don't know; I'm lonely, I guess. I'm awfully lonely. I'm working all alone, towards nothing. There's some compensation for you people. I only hear heartbeats through a stethoscope. You hear them in the air." (264–65)

挫折寸前のストライキを前にして平静さを失っているのは，常識的に考えるとマックである。事実，マックは暴力に走ったり，混乱した態度を示したりしている。マックは，一方で，大衆を率いる強いリーダーであるが，他方，大衆を集団的な反知性として動かそうとするマックの頭脳—つまり反知性のための知略には，ある種の悪魔的な狂気と紙一重のものがある。そのマックの口を借りて，知的で理性的なはずのバートン医師が平静さを失っている，疲れていると言わせているのはどういうことなのか。

バートンは確かに，一般の労働者にも，マックらの指導者からも尊敬されている唯一の人物で，スタインベックがこの登場人物に大きな敬意を払っていることは間違いない。しかし，同時にバートンの知性，理性，科学的専門性，患者への丁寧な態度にもかかわらず，何かが欠如している。そしてその欠如は，顕微鏡で病原菌を見て喜びを得るような彼の科学者としての世界観と無関係ではないとスタインベックは考えたように思われる。もちろんバートンの知性

は，マックやジムや集団人間の反知性に対峙するものとして重要であり，社会的有用性を持つとスタインベックも見ていたことは確かである。しかし，バートン自身の幸福感が達成され，彼と大衆との間に病原菌と観察者との関係だけではない何か—心の触れ合いというか，罪の共有というか，そのようなものがない限り，彼の知性は空回りしてしまい，狂気の時代への歯止めにはならない，そんなおぼろげな意識のためにスタインベックはいわばバートン医師を最後まで描くことが不可能になって放棄せざるをえなかった—そんな勝手な想像をしてしまう。本作品における知性と反知性の闘争は，バートンの知性と集団人間としての大衆の反知性，マックの傲慢な知略と大衆の反知性，バートンの知性と反知性的集団人間の司令塔としてのマックの反知性的知能，そしてバートンの科学的知性に対する作者スタインベックの賞賛と批判といった形で，複雑な様相を呈している。この小説の中には，「人民」や「プロレタリアート」を神格化する傾向のあった1930年代の知識階級が抱いた大衆に対する期待と漠然たる恐怖が見え隠れしている。さらに，ファシズムの台頭や第二次世界大戦の予兆など反理性，反知性へと動いていく時代の中で，良き世界をもたらす科学的知性の可能性を信じる楽観主義と共に，その限界を強く意識する悲観主義が同居していたのである。その意味でも，この小説の中でスタインベック自身が，「勝敗のつかない」まさにdubiousなbattleを演じているともいえる。

最後にこの小説のタイトルと，小説巻頭の題辞に少し触れておきたい。Miltonの*Paradise Lost*(1667)の第一巻から取られた一節が，この小説の題詞となっている。

> Innumerable force of Spirits armed,
> That durst dislike his reign, and, me preferring,
> His utmost power with adverse power opposed
> In dubious battle on the plains of Heaven
> And shook his throne. What though the field be lost?
> All is not lost—the unconquerable will,
> And study of revenge, immortal hate,

And courage never to submit or yield:
And what is else not to be overcome?

この中での「私」というのは，神に背き，夥しい天使の軍勢を味方につけたものの，その天使たちともども天国から追放され，今や地獄に落ちたサタンである。この一節は，元気を取り戻したサタンが，自分の傍らに横たわっている軍勢を呼び起こし，彼らに向かって話しかけ，天国を再び手中に収める希望はまだ残されていると言って鼓舞する場面である。敗北に終わったとみえた自分たちの戦いの決着はまだついていない，強い意志，敵への憎悪，復讐心，そして勇気があればまだ勝利できるかもしれないと宣言するのだ。

このミルトンの一節を，スタインベックの小説に引きつけて解釈すれば，サタンとは，夥しい労働者の軍勢を引き連れて，カルフォルニアの果樹園を支配している資本家に勝ち目のない戦いを挑んでいるマックやジムだということになる。新米党員のジムは何度もマックに，「このストライキに我々は勝てるのか」と聞くが，マックは「この戦いに勝てる見込みはなくても，季節労働者が次に移動する場所での戦いにつながればいいのだ」と言う。スタインベックは，勝ち目のない次への戦いに向けて仲間を鼓舞するサタンのように，特権的階級に対して戦う小さな人々を引き連れて進んでいくマックのような人物に対して，ある種の共感を覚えていたといえるだろう。マックたちは最後には果樹園主たちの反対にあって林檎園—すなわちエデンの園から追放されるわけだが，それは，果樹園主たちの作り出した既成秩序を乱した反逆者としてだけではなく，同時に，その理想郷を自分たちの欲望や支配欲や愚かな判断によってディストピアにしてしまったせいでもある。その意味で彼らの戦いは，その目的も手段も疑わしい自滅的な戦いでもある。

1935年の1月15日にスタインベックは，作家志望の青年George Albee (Parini 111)に宛てた手紙で，「賃上げ手段としてのストライキには興味がないし，正義だ，抑圧だとえらそうなことを言いたくもない。状況を示唆している事象には関心がないのだ。だが，人間は自分の内部にあるなにかを憎むものでね。人は自然のなかにある障害はことごとく打ち破ってきたのに，自分自身だけには

勝てない。自分を負かすなら，ほかの個々人もことごとく殺すことになるだろうからね。」(『書簡集』82) と書いた。この手紙からは，自分たちの前に立ちはだかる外的障害を乗り越えようと勝ち目のない戦いを続ける負け犬的主人公たちへのスタインベックの共感とともに，終末論的なペシミズムが読み取れる。人間全般に巣くう内なる悪—内なるサタンは，バートン医師のメスをもってしても取り除くことはできない，消毒薬を振りまいても，やがて労働者キャンプが不衛生な汚れた場所になるように，そうした人間性は残ると，スタインベックは考えずにはいられなかった。スタインベックのアンビヴァレントな世界観は，勇気と不屈の意志がある限り，新しい素晴らしい世界は自分たちの手で作り出せるという極めてアメリカ的な夢と同時に，その夢があるいは大いなる幻であるかもしれないという認識を内包するものだった。たしかに，バートン医師に見られる科学主義とヒューマニズムの合体は，混沌とした世界における一筋の光明として描かれている。同時に，人間の心の中の根源的な病巣，あるいは社会全体の病巣を「見る」ことだけしかできないバートンの挫折を描くことで，この小説は労働者，ストライキ指導者だけではなく，傷口という戦場で戦う医師の「疑わしき」戦いの現場ともなっているのである。

(3) *All the King's Men* を読む

『ワシントン広場』の舞台がニューヨーク，『疑わしき戦い』の舞台がカルフォルニアであるのに対し，この作品の舞台はアメリカ南部，ルイジアナ州である。理性の勝ちすぎた紳士的医師スローパー，人民の味方であり，科学主義と実践的ヒューマニズムを追求するバートンに対して，この作品はエリート医師が「殺人」という反社会的行為を犯す人物として描かれている点で興味深い。この作品に関してウォレンは，現実の人物や事件に基づいた歴史小説ではないことを強調している。同時に，作中の知事Willie Starkのモデルとなったルイジアナの政治家（元知事，暗殺当時は上院議員）のHuey P. Longが，1935年9月8日に州議事堂で青年医師によって狙撃され二日後に死亡し，その医師もボディー・ガードたちの一斉射撃によって即死するという衝撃的事件がなければ，この小説は書かれなかっただろうと述べている(Warren, ix)。今回の考察の対象とな

る作中のAdam Stantonという医師は，現実にロングを狙撃した医師Carl Austin Weiss, Jrとは，その環境や性格づけが異なり，その行動の動機もウォレンの作品世界の中でのみ成立しているといえる。ここでは，ウォレンの独自の感性によってデフォルメされた医師アダム・スタントンの姿を通して，科学の力を借りて人の命を救うはずの医師が，殺人という非理性的行為に駆り立てられていくプロセスに注目したい。

ロングが狙撃された時に，ウォレンはルイジアナ州立大学の英文科講師であった(Bohner 67)。同大学が事件の起こった州都Baton Rougeにあることを考えると，当時の新聞，特に地元紙にトップ記事で報道されたこの事件がウォレンにとって身近なものだったことは想像に難くない。この事件を小説にする前に，彼はいったん，物語を詩劇として劇場で公演することを考えていた。1953版のウォレンの序文によれば，狙撃される政治家と犯人の劇的な対決が詩劇の中心であり，小説の語り手となるJack Burdenは，狙撃犯の医師が犯行前に一瞬見た幼馴染みの新聞記者にすぎなかった(Warren, viii)。この小説の揺籃期においては，狙撃犯が重要な人物として構想されていたのである。したがって，小説では若干影がうすくなった感のある医師アダム・スタントンを，ウィリー・スタークとの対比において再検証してみることが必要である。

まず，アダムとウィリーを対照的な人物像として見る場合，そこには，二人の属する階級，生活環境，教育という要素が絡んでくる。現実の狙撃犯の医師ワイスはNew Orleansの医者の息子であったが，小説の中ではアダムは元知事スタントンの息子ということになっている。つまり，アダムとその妹のAnneは，ニューオーリンズをモデルにしたと思われる架空の都市Bruden's Landingの超エリート階級に属しているのだ。ジャック・バードンは彼らの幼馴染みだが，その本当の父親は判事であり，育ての父親は元検察官だった。元知事，元検察官，元判事といった人々は，いわば貴族的な知的・政治的エリートで，石油関係のビジネス・エリートと同盟を結び，その州の政治秩序を作ってきたのである。こうしたエリート階級出身のアダムに対し，ウィリーは，貧しい農村地帯の出身で，堅実な小学校教師の妻の激励を受けて，汚職政治，教育設備の不備に異議を唱え，民衆，弱者の味方として近隣の小さな町の会計主任の選挙

に出馬する。この1922年の選挙を取材した語り手ジャックが見たのは，自分やアダムのような都会のエリート階級とは雲泥の差のある生真面目な田舎者のウィリーだった。ウォレンは，実際の狙撃犯ワイスの生まれた環境よりもはるかに高い極みにアダムを据えることで，両者の運命的な対決の構図を強めたといえよう。

教育，経歴という面では，アダムはジョン・ホプキンズ大学のメディカル・スクールを卒業し，東部でインターンをした後に，バトン・ルージュの病院に勤務している優秀な外科医として設定されている。これは，ルイジアナ州立大学で医学を修め，ヨーロッパに留学し，ニューヨークでのインターン経験を経て，バトン・ルージュの父の医院で開業したワイスとかなり良く似た経歴（三宅189-90）である。アダムは単に元知事という既成のエリート階級の出身であるというだけではなく，後進的な南部を出て最先端の知識・技術を吸収した近代的な科学的エリートでもあるのだ。これに対して，ウィリーは，最初の選挙で落選した後は，独学で法律を学び，弁護士の免許を取った苦学の人，アメリカ的self-made manであった。特権階級に育ち，最先端の知識を身につけたアダムと，農村に育って無学ながら刻苦勉励したウィリーとは，対照的な位置にあることは明らかであろう。

さて，アダムを，出身階級，受けた教育，また医師としての職業的訓練からみて伝統的エリート階級に属しかつ最先端の科学的知識を身につけた二重の知的エリートとみなした場合，ウィリーは，エリート階級に対抗し，「民衆」のスポークスマンを自負するとともに，近代的な科学主義の洗礼を受けていない，反近代的で農本的アメリカを代表している。その政治家としての「強み」は，本から得られる「知識」よりも「民衆の知恵」(folk wisdom)に依拠して，大衆の正義感に訴える一方で，金をばらまき，敵対者には恐喝や反対キャンペーンで臨むといった手法である。ウィリーは選挙キャンペーンでは，貧しい農民の子供たちを対象とした無償教科書配布，さらには金のない患者でも治療を受けられる病院建設計画を公約するなど，平等主義的で民主主義的な側面も持っていたからこそ農村部の民衆から絶大な人気を得た。このことは，語り手ジャックの眼を通して一貫して描かれている。つまり，ウィリーは，アダム

やジャックの出身階級のような知的エリートに戦いを挑んだという意味でanti-intellectualではあるが，本にかじりついて独学で弁護士になったことからもわかるように，知識や知性に関心や憧憬の念がなかったわけではない。アメリカにおける反知性主義を，東部を中心とした知的な特権階級に対して非特権的な多数者が挑んだ抗争の歴史として位置づけようとしたホーフスタッターは，「反知性主義は，この国の民主的制度や平等主義的感情に根ざしている」（ホーフスタッター，356）と述べている。つまりホーフスタッターは，反知性主義とは，富ばかりではなく知識や知性の所有においても劣勢な立場にいた「持たざるもの」たちの自己防衛的な心的習性ないしは鬱屈した感情であり，ときには「持てるもの」を積極的に攻撃する言語的な武器でもあったと指摘する。

ヒューイ・ロングが生まれ育ったルイジアナ州の中北部に位置するWinnfieldという町は，1890年代にポピュリズムが広範な影響力を持った地域だった。南部や中西部の小規模な自営農民が，東部の金融や鉄道などの大資本に対して挑んだポピュリストの戦いは総じて農民側の敗北で終わった（土田17–19；Hofstadter [1953], 60–93）。ロングは，ポピュリストの怨念がくすぶり，州都心部の資本家や政治家への怒りと鬱憤が募っていたウィンフィールド周辺の高地農民(hill farmer)たちを自己陣営に取り込むことで，その選挙基盤を固めていったといわれている（三宅，16–26）。小説の中でも，ウィリーは，州南部の都市に集中する既成の特権階級—すなわちアダムやジャックの父親世代の属するエリート階級，およびその同盟者の金持ち連中を徹底的に攻撃し，政治的，文化的，知的なヘゲモニーを民衆の手に取り戻すという姿勢を示すことで，自らの手に政治権力を集中させていく。したがって，ウィリーは三つの意味で反知性，反知性主義の陣営に属すると考えられる。一つは，既成のエリート階級から政治的ヘゲモニーを取り戻す平等主義的で改革主義的なポピュリストとして，富や知識の再分配を要求するという反エリート，反知識人階級の立場である。第二は，こうした運動の渦中で，大衆に教育改革や医療改革を「あめ」として与えながら実は彼らの無知を利用して自らの手中に権力を掌握していくマキアベリ的な，知性への敵対者の立場である。第三は，知的階級を自らに従わせることで，その内なる崩壊をもたらす人物として，知性に敵対する陣営にいるのであ

る。まず，新聞記者のジャックを自分の陣営の側近として取り込み，優秀な外科医アダムを自らが建設する病院の院長に据えた。さらに慈善事業の活動のため陳情にきたアダムの妹アンを自らの愛人にしたのである。このように，かつて成り上がり政治家ウィリーに敵対した伝統的上層階級，知的階級を自らの陣営に取り込み，すべてを自分の臣下にしていくことによって，事実上，知的階級を腐敗させ，解体させていったのである。

この小説のAll the King's Menというタイトルには複数の含意がある。まず，ヒューイ・ロングのニックネームが，重要人物とか大物といった意味のthe Kingfishであったことをもじったものである。さらに，ロングが選挙の折に用いた"Every Man a King"（「万人が王様である」）というポピュリスト的なフレーズを転倒させたとも考えられる。ウィリーの当初の平等主義が，いつのまにかすべてを自分の臣下にして批判の芽を断ち切る独裁的姿勢へと変わっていく様をアイロニカルに表現したものだといえよう。最後に，このタイトルが，以下に引用する有名なマザー・グースの唄からきていることは，つとに指摘されているとおりである（中村84；平野60–62）。

Humpty Dumpty sat on a wall,
Humpty Dumpty had a great fall.
All the king's horses,
And all the king's men,
Couldn't put Humpty together again.

再生の象徴たる「卵」すなわち，当初ウィリーがその臣下を総動員して築こうとしたユートピアは，最後に粉々に壊れてしまったということなのか，あるいはアメリカではインテリを軽蔑する言葉としてeggheadという表現があるので，一度転落してしまった南部の伝統的知的エリート階級は，もう元に戻ることはできないという去りゆく階級へのエレジーなのか，そのあたりは様々な解釈がありうるであろう。いずれにせよ，マザー・グースの唄だけでなく，the Kingfishというあだ名や"Everyone the King"といったキャッチフレーズもあっ

たことを考えると，実に巧妙なタイトルであるといえる。

さて，ここからは，アダムがウィリーに銃口を向けるまでの両者の具体的な接触の場面に注目してみたいと思う。どこをとっても非のうちどころのない青年医師ワイスが，直接的関わりを持たないロングを殺した動機については当時かなり議論されたようである。だが，ウォレンの場合は，事件よりはるか前に二人の間に関係性を導入することで，知性の代表，エリート階級の代表，そして命を救うという使命を持った医師がなぜ暗殺という暴力に訴えるに至ったのかを，読者の納得のいくものにしようとしたのである。

アダムがウィリーとはじめて個人的に接触するのは，なにか自分の名前が残せるような立派な仕事をしたいと思ったウィリーが，ジャックを介して，アダムに病院の院長職への就任を要請するところである。アダムは，汚職と脅迫など悪に汚れたウィリーの独裁的政治スタイルに対して反発しており，この申し出を固辞する。しかし，アダムは，知事として尊敬されていた亡き父親が，友人である判事の不正行為を黙認していたという遠い過去の秘密をジャックから知らされるに及んで，非の打ち所のない善はありえないと観念する。こうして彼は，ウィリーの病院建設の計画に参画することをしぶしぶ引き受けるのである。ジャックは，アダムが禁欲的な生活を送るアパートに，院長就任の礼を言いたいというウィリーを連れてゆく。「なめらかな石で彫ったみたいに白くて冷たい」(white and stony, as though carved out of some slick stone) (Warren 272; ウォーレン320) 顔をしたアダムに向かって，ウィリーは，善は悪の中から生まれる ("You got to make it [goodness] out of badness") のであり，善は少しずつ作りあげていく (You must make it up as you go along) ものだと言って (Warren, 272–73), 病院建設という善行への協力を要請する。しかし，汚濁にまみれたウィリーと手を結ぶことで悪に手を汚すことを徹底的に拒否するアダムに対して，ウィリーは最後にやや嘲笑的に次のように言う。

> "Doc," he said, "just don't you worry. I'll keep your little mitts clean. I'll keep you clean all over, Doc. I'll put you in that beautiful, antiseptic, sterile, six-million-dollar hospital, and wrap you in cellophane, untouched by human hands." (275)

たとえ自分が汚い政治の「肥溜め」にどっぷりつかっていたとしても，彼が建てる病院の院長になるアダムは，完璧に清潔な病院と同じように倫理的に無菌状態に保たれるというウィリーの約束はある種の途方もない冗談であり，皮肉のように思われる。“sterile”には「生殖力がない」という意味もあり，「男らしい」ウィリーに比べて，「人間の手に汚されていないセロファンで包まれた」アダムは，男性的生殖能力の欠乏した「不毛(sterile)な知性」であることが暗示されている。さらに彼は，現実の人間社会との接触を失った疎外された存在のように描かれている。「なめらかな石で彫ったみたいに白くて冷たい」というアダムの顔の描写は，白い無機質な病院のイメージと重なり，あえていえば，アダム自身が擬人化された病院といってもよい。お前の手は汚さないとウィリーが請合ったことにより，アダムの中で，ウィリーの体現する汚い政治，彼を支持する無知な民衆，彼に迎合する仲間の政治家や側近たちからの影響（感染）を断ち切るという倫理的決意と，無菌の完璧な病院を指揮監督するという医師としての職業意識が一体となって動き出すのである。

ウィリーとアダムが対峙することになる小説の中での次なる展開は，ウィリーの息子Tom Starkがアメリカン・フットボールの試合中に怪我をした時である。アダムは，命取りになるかもしれない外科手術を「十分責任をもって」勧める外科医として，そして，ウィリーは「一か八かの勝負に賭け」ようとする父親として対面する。手術後に，トムの「生命は助かる」ものの「脊髄がつぶれていた」こと―すなわち「生涯半身不随」(“The patient will remain paralyzed for the rest of his life”)になる(Warren, 402)ことを告げるときのアダムの顔は，“gray and stony in the face”(405)と形容されている。初対面の時と同じ“stony”という言葉が使われているのは，医師としての職業訓練を積んだ人間の変わらぬ冷静沈着さを表わす一方で，顔の色は“white”から“gray”へと微妙に変化している。買収や恐喝などウィリーにつきまとう黒い影に対して，アダムの正義感や善や清潔感が強調されていた初対面の時と比べて，ウィリーの家族に起こった予期せぬ悲劇に運命的に関わってしまったアダムの立場はもはや純白のinnocenceではない，曖昧なグレイゾーンに入ってしまったのである。

このようにウォレンは最後の悲劇に向けて巧妙に布石を打っていく。普段は危機にあっても冷静であり続けるアダムを最後にウィリー暗殺という狂気に追いやったのは，ウィリーの死を望む側近が彼の耳に囁いた讒言であった。アダムが病院院長の地位を得たのは，妹のアンが実はウィリーの愛人だったからだと告げたのだ。物語の最初からアダムとアンはまるで双子のように離れがたい兄妹として描かれている。愛する妹の裏切りへの怒り，元知事の娘という貴族的階級に属する妹をこの成り上がりの独裁者にこれ以上汚されたくないというプライド，そして医師としての能力ではなく妹の貞操を犠牲にして自分の地位を得たという屈辱が，恐らく彼に銃を握らせたのだろうということが，アンを含めた他の登場人物とジャックとの会話からわかってくる。妹がウィリーの愛人となったことは，妹の兄に対する裏切りであり，伝統的支配階級が，王者となった成り上がり知事の臣下に下ったことのグロテスクな象徴だった。そして，アンがウィリーの愛人になっただけではなく，アダムも病院プロジェクトを引き受けることでウィリーの臣下に下ったという二重の敗北がアダムに重くのしかかってくる。ある意味で，アンとアダムは一卵性の双子のような存在で，ハンプティとダンプティはまさに倫理的にも階級的にも知的にも堕ちた存在となってしまった。その絶望こそが，知性の人アダムを反知性的な殺人という行為に追いやったとも考えられるのだ。

この小説の題辞は，Danteの*La Divina Commedia* (Purgatorio, Ⅲ)の*Mentre che la speranza ha fior del verde*（希望が緑色をたもって枯れぬ限り）という一節である。ウォレンは，知恵の木から林檎を食べたアダム，すなわち父親のかつての不正，妹のウィリーとの関係，そして自分もまた悪の巣の中に絡め取られていたことを認識したアダムに，殺人という罪を犯させた後にエデンの園から追放する。残ったのは，ウィリーの愛人となることでアダムの眼から見れば穢れてしまったものの，ウィリーの持っていた何かを愛したという点で，決して堕落していなかったアンであり，また，ウィリーを反知性的な独裁者ではなく，善と悪の入り混じった一人の悲劇的人物として再認識したジャックであった。ウォレンは，この二人の再生に，いったんは壊れた秩序が，新しい認識の衝撃の中から別の形で再生していく可能性を託したとも考えられよう。

知性と反知性の対決の構図として見た場合，アダムの純粋ともいえる知性・理性は，無菌状態の理想の病院のような社会を夢見たが，善と悪が混じりあう現実社会はその理想を裏切るものだった。その現実に直面したときに，知性の人は，まるで患者に巣くう癌をメスで抉り取るように，今や彼には社会の癌にも等しい悪の象徴ウィリーを抹殺するのである。つまり，あまりにも純粋培養された知性は実は反知性と表裏の関係となり，知性の人アダムと反知性のウィリーは再び一卵性双生児のハンプティ・ダンプティのように，お互いに破壊しあうのである。

ウォレンは，自伝的小説*A Place to Come To* (1977)の中で，シカゴ大学で勉強する主人公が，恩師となる亡命知識人Dr. Stahlmannのいう“*imperium intellectus*”の住人として，帰るべき故郷もない根無し草として生きていくか，それとも粗野で反知性的な故郷に戻るべきか逡巡する姿を描いている。南部を出て北部の大学で教えたウォレンは，新批評家の一人として，まさに「知性の帝国」の住人であり，たしかに彼には生涯にわたる知への憧憬があったように思える。と同時に，アメリカの後進地域としての南部の反知の世界に対して拭いがたいノスタルジアを覚えたのではないだろうか。その知的な旅路の果てに殺人という形で「知性の帝国」から追放されたアダムに，知性の人ウォレンは自分を重ね，同時に南部政治のボスとしてポピュリスト的な反知性主義を煽った挙句，自らもその犠牲となったウィリーに，南部人としての切ない連帯感を抱いたのかもしれない。語り手ジャックを，ウィリーと狙撃犯アダムの両者，その反知と知の世界の両方を理解し，抱擁する人物として描いたことは，作者ウォレンのこうした二重意識の反映だったともいえるだろう。

結語にかえて

ジェイムズの『ワシントン広場』，スタインベックの『疑わしき戦い』，ウォレンの『すべて王の臣』を題材にして，アメリカ文学の中の知性と反知性，知性主義と反知性主義の構図を検証してみた。ジェイムズの作品の中では，知性万能主義で，娘の心を覗き込み，それを心理的に操作して，自分の考え方に従

わせようとする医師スローパーに対して，心という神聖な場所を隠そうとする娘の静かな抵抗のドラマを軸に，intellect対heartという，アメリカ文学の中で繰り返される構図の一例を見た。次にスタインベックの『疑わしき戦い』では，ストライキ闘争の指導者マックとジムが，労働者のユートピアではなくディストピアを作り出してしまう反知性的な動きを「悲しげな目」で観察するバートン医師自身の「疑わしき戦い」に光をあてた。イデオロギー的，または宗教的な狂信のなかで彷徨する二人に対して，医師の知性や理性が彼らの自滅的行動に歯止めをかけうる可能性を示唆した。しかし，人道的だが孤独な医師バートンが，マックらの指揮する労働者たちのキャンプから突如姿を消し，作品世界からも姿を消すのは，スタインベックが人間性の根源的悪の前で，科学的知性ですらもその有用性に限界があると考えていた可能性があることに触れた。そして，最後の『すべて王の臣』では，既成の知的・政治的エリートによる富と知の独占に抵抗してポピュリスト的な反エリート階級の闘争を始めるウィリーが，次第に無知な大衆を利用して反知性的な独裁者へと堕落していく姿と，伝統的エリート階級の一員としてのプライドと，先端の科学的知識を身につけた近代的エリートである外科医アダムが，純粋な知，汚されていない無菌の世界を求めるがゆえに，逆にウィリーの暗殺という反知性的行為に走る様を見てきた。知性と反知性が，壊れて元に戻らないハンプティ・ダンプティのように互いを破壊しあう危険性をアダムとウィリーの運命に見たウォレン自身に，知性への憧憬と反知性への共感が同居していた可能性があることにも言及した。知性主義と反知性主義が単純な二項対立ではなく，複雑に絡みあい，さらに表裏一体の関係にも移行しうるところに，知性への憧れと不信というアンビヴァレントな心的傾向が見られ，その揺らぎは近代的知性のひとつの典型としての医師の表象にも現れている。本論文では，三人のアメリカ作家の作品を再読することを通して，こうしたアンビヴァレンスの一端を垣間見ようとした。

＊本論は2009年度名古屋大学英文学会クリスマスセミナー（2009年12月18日）における講演に基づくものである。

Works Cited

Bohner, Charles. *Robert Penn Warren*. Revised ed. Boson: Twayne Publishers, 1981.

Edel, Leon. *Henry James: The Conquest of London: 1870–1881*. 1962; New York: Avon Books, 1978.

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter and Selected Tales*. Harmondswroth: Penguin Books, 1970.

Hemingway, Ernest. *In Our Time*. New York: Scribner, 2003.

Hofstadter, Richard. *The Age of Reform: From Bryan to F. D. R.* New York: Alfred A. Knopf, 1953.

——. *Anti-Intellectualism in American Life*. New York: Alfred A. Knopf, 1963.

James, Henry. *Washington Square*. Harmondworth: Penguin Books, 1963.

Lisca, Peter. *The Wide World of John Steinbeck*. Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1958.

Parini, Jay. *John Steinbeck: A Biography*. New York: Henry Holt and Company, 1995.

Steinbeck, John. *In Dubious Battle*. New York: Penguin, 1979.

Warren, Robert Penn. *All the King's Men*. New York: Random House, 1953.

——. *A Place to Come To*. Ed. Koichi Nakamura. Kyoto: Rinsen, 1997.

R. P. ウォーレン『すべて王の臣』鈴木重吉訳，白水社，1966.

J. スタインベック『疑わしき戦い』（スタインベック全集第3巻）廣瀬英一・小田敦子訳，大阪教育図書，1997.

——.『スタインベック書簡集—手紙が語る人生』（スタインベック全集19巻）浅野敏夫・佐川和茂訳，大阪教育図書，1996.

土田宏『幻の大統領—ヒューイ・ロングの生涯』彩流社，1984.

中村紘一『ロバート・ペン・ウォレン—アメリカ南部小説の愉しみ②』臨川書店，1998.

平野敬一『マザー・グースの世界：伝承童謡の周辺』ELEC出版部，1974.

R. ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳，みすず書房，2003.

三宅昭良『アメリカン・ファシズム—ロングとローズヴェルト』講談社，1997.

Synopsis

Intellectualism vs. Anti-Intellectualism:
Representations of the Doctor in the Works of James, Steinbeck and Warren

Reiko Maekawa

Anti-intellectualism, as Richard Hofstadter points out in his 1963 *Anti-Intellectualism in American Life*, has had a persistent hold on American life ranging from religion and education to politics and business. Anti-intellectualism appears in manifold disguises such as (1) the revolt of the heart against intellect (2) religious and ideological enthusiasm waging a war against scientific intellectualism (3) egalitarian and populist protest against the intellectual classes and (4) agrarian and pre-modern sensitivities against modern temper. These tangled and complex variants of anti-intellectualism are reflected in the way American novelists depicted the medical profession. In the United States, the medical profession is held in great esteem. The doctor, as a torch bearer of civilization and a missionary of science, is often enshrined in the highest stratum of American society and respected for scientific expertise, moral devotion and intellectual integrity. Yet, the literary representations of the medical profession in the United States are more complex and ambiguous. In many cases, the doctor's intellectual and moral superiority over others are admired, questioned and refuted alternately.

The doctor plays a pivotal role in each of three novels which will be examined closely in this study, namely Henry James's *Washington Square* (1880), John Steinbeck's *In Dubious Battle* (1936), and Robert Penn Warren's *All the King's Men* (1946). In each novel there is at least one character who pits himself/herself against what the fictional doctor seems to represent: heartless intellect, rational and scientific intellectualism, elitism, and disregard for folk wisdom and alienation from human and communal ties.

In James's *Washington Square* Dr. Austin Sloper, a famed doctor in New York, is portrayed as a man with extraordinary intellect, who tries to prevent his daughter Catherine from marrying her Europeanized suitor who he

correctly guesses is interested in her as the heiress of his vast fortune. James centers his narrative on the way the quiet and modest Catherine tries to conceal her heart, thus resisting Dr. Sloper's psychological scrutiny and manipulation. Catherine's heart silently cries out against Dr. Sloper's cold intellect, which James depicts with an ambiguous mixture of admiration and suspicion.

Dr. Burton in Steinbeck's *In Dubious Battle* is an intellectual reformer type who tries to support the doomed apple pickers' strike with his medical expertise. Mac, an organizer sent from the Party and an ideological zealot, represents the anti-intellectual, albeit leftist, camp. He plunges into a dubious battle, increasingly resorting to meaningless violence and ignoring Burton's rational advice. The tug-of-war between Burton's intellect and Mac's blind and wrong-headed activism comes to an end when Steinbeck drops the doctor from his narrative by making him leave the strikers' would-be utopia. Burton's scientific objectivity and detachment made him a lonely figure separated from the mass of workers, as well as the human race in general.

In *All the King's Men* Adam Stanton, an elite surgeon and son of the ex-governor, falls from grace when he kills Governor Willie Stark, a fictional character based on Huey Long. Adam's upper class upbringing coupled with educational advantage and urban sophistication is contrasted with Willie's rural boyhood, self-learning and populist sentiments. Willie, feeding on poor farmers' grudge against privileged classes, becomes an almost dictatorial "kingfish." Willie, wittingly or unwittingly, undermines the moral authority of the old establishment to which Adam belongs. Willie, the man of action, and Adam, the man of ideas, destroy each other, thus obliterating both Adam's pure intellect and Willie's blind, unthinking and sometimes inhuman pragmatism.

The re-examination of these three novels shows that the way the medical profession has been depicted in American literature is fraught with paradoxes and contradictions. America's admiration for the doctor as

a pragmatic scientist is intermixed with its suspicion of "eggheads," pale intellectuals and elitism. A further exploration of representations of the medical profession in American literature might give us a useful insight into yet another dimension of anti-intellectualism in America.